

SINUSOID NEWS

肝類洞壁細胞研究会ニュース

第6号
2006年3月発行

目次

- ・第19回肝類洞壁細胞研究会を主催して…………… 渡辺純夫………… P 1
- ・第13回国際肝類洞壁細胞シンポジウムについて…………… 内藤 眞………… P 2
- ・今後の肝類洞壁細胞研究会の方向性について…………… 谷川久一………… P 4
- ・編集後記…………… 和氣健二郎… P 4

第19回肝類洞壁細胞研究会を 主催して

秋田大学消化器内科 渡辺純夫

去る10月22日、23日の二日間にわたり、秋田キャッスルホテルを会場に肝類洞壁細胞研究会を当番世話人として主催させていただいた。この会は例年12月に開催されることが多かったが、当地は12月になると降雪のため交通網の混乱の可能性が高くなるため、前倒してこの時期の開催とさせていただいた。全国から71名の参加者があり、二日間にわたり活発に議論が戦わされ充実した会であった。22日の夜は、参加者全員による懇親会を催し、秋田の地酒と食材をお楽しみいただいた。主催者側としては、研究会の内容が一番ですが、懇親会も楽しいものにしたと色々企画をして、地元のものを楽しんでいただくことにしましたが、会員の先生方には十分楽しんでいただけたでしょうか？

本研究会は最初の11回までは谷川先生のもと久留米で開催され、その後全国各地を持ち回りで開催されている。小生は、記憶が正しければ、第2回から参加させていただいている。その頃の演題を思い出すと、形態学的な演題がほとんどで、電子顕微鏡を使った仕事が多く、類洞壁細胞の中でもほとんどがクッパー細胞を対象とした研究であった。考えてみれば、細胞培養は、やと肝実質細胞とクッパー細胞ができるようになった時代であったし、今のように各種抗体を用いて簡単に免疫染色が出来る時代でもなかったし、分子生物学的手法が普及する以前の時代であったので、当然のことであったと思う。その後、

肝星細胞のマーカーとしてデスミンが確認され、各種モノクローナル抗体が使えるようになり、また細胞分離法の発展に伴い、星細胞、内皮細胞、樹状細胞の培養法が確立され爆発的に細胞レベルの仕事が増えて行き、さらに近年の分子生物学的研究につながっていった。今回の研究会も、全27演題中16題が星細胞、7題がクッパー細胞、内皮細胞が2題、樹状細胞が2題で多くの演題では、遺伝子操作などを含めた分子生物学的手法を駆使したものであった。この傾向は今後も続くものと思われ、研究内容がスマートになり研究のスピードが益々速まるものと思う。乗り遅れないように積極的に研究を進めていきたいものである。

さて、本年は国際クッパー細胞シンポジウムが新潟で開催され、さらに本会の20回の例会も開催されるという忙しい年になりそうである。まだまだ時間があるので、この領域の研究をじっくり進めていただき、活発な楽しい会にしてほしいものである。



第13回国際肝類洞壁細胞 シンポジウムについて (13th International Symposium on Cells of the Hepatic Sinusoid)

新潟大学大学院医歯学総合研究科
細胞機能講座分子細胞病理学分野
内藤 眞



13th International Symposium on
Cells of the Hepatic Sinusoid
3-6 September, 2006, Niigata, Japan

ご存知のように、本シンポジウムは肝類洞壁細胞に関する唯一の国際シンポジウムであり、1977年Wisse博士によって第1回のシンポジウムがオランダで開催されて以来2～3年ごとに開催され(表1)、前はスペインのビルバオに20ヶ国・約200名が参加いたしました。わが国で開催されるのは和氣先生が会長を務められた第7回(京都)に次いで2度目であります。

表1. これまでの開催状況

回	開催年	国名	都市
1	1977	オランダ	ライデン
2	1982	オランダ	ライデン
3	1985	フランス	ストラスブール
4	1988	ドイツ	フライブルグ
5	1990	アメリカ	ツーソン
6	1992	ベルギー	アントワープ
7	1994	日本	京都
8	1996	フランス	ポルドー
9	1998	ニュージーランド	クライストチャーチ
10	2000	イギリス	サザンプトン
11	2002	アメリカ	ツーソン
12	2004	スペイン	ビルバオ

昨年の10月22-23日に秋田において開催されました第19回国際肝類洞壁細胞研究会の世話人会で、今回の国際シンポジウムに関する国内組織委員会を組織いただきました。現在下記の計画のもとに鋭意準備を進めております。

当初の岡山開催予定が急遽変更になったためご案内が遅れておりますが、この紙面をお借りしてお知らせ申し上げます。ホームページを開設いたしました。

登録、演題申し込みはホームページよりアクセスして
くださるようお願いいたします。

<http://www.okayama-u.ac.jp/user/ischs13/index.htm>

本シンポジウムを日本の研究を世界に発信する場としていただければ幸いです。皆様方のご参加とご協力をよろしく申し上げます。

第13回肝類洞壁細胞国際シンポジウム(案)

開催期間: 2006年9月3日(日)～9月6日(水)4日間

開催場所: 新潟県新潟市 新潟大学医学部 有壬会館

(注: 9月3日はホテル イタリア軒)

登録料:

(昼食、夕食、エクスカージョン込み。宿泊を含まず)

(5月31日以前) (6月1日以降)

参加者	50,000円	60,000円
同伴者	30,000円	40,000円

演題募集:

口頭発表(5月10日まで) ポスター発表(6月末まで)

会議日程:

	午前	午後	夕
9月3日(日)		登録	ウェルカムレセプション
9月4日(月)	会議 (ポスター展示)		
9月5日(火)	会議 + ポスター発表	エクスカージョン・夕食会	
9月6日(水)	会議 (ポスター展示)		バンケット

9月3日(日)



歓迎会: ホテル イタリア軒

15:00 - 17:00 登録

17:00 - 18:00 記念講演

"プロテオミクス研究の最先端"

児玉 龍彦 教授

(東京大学先端科学技術研究センター)

18:30 - 20:30 歓迎会

9月4日 (月)

会議場：新潟大学医学部有壬記念館



8:30 - 12:00 会議
 12:00 - 13:00 昼食
 13:00 - 14:00 ポスター閲覧
 14:00 - 18:00 会議
 19:00 - 21:00 五十嵐邸 (夕食)

http://www.swanlake.co.jp/main/ikarashi_info.htm



9月5日 (火)

8:30 - 12:00 会議
 12:00 - 13:00 昼食
 13:00 - 15:00 ポスター発表
 15:00 - 市内観光
 19:30 - 21:30 夕食

9月6日 (水)

8:30 - 12:00 会議
 12:00 - 13:00 昼食
 14:00 - 18:00 会議
 19:00 - 21:00 パンケット (イタリア軒)

ホテル 料金: 朝食, 税込 / チェックイン, アウト
 シングル, ツインのシングルコース

1. ホテルイタリア軒 9,000, 13,000 / 3:00, 12:00
 Fax. 025-224-7679, <http://www.italiaken.com>

2. 新潟シティホテル 6,700, 9,000 / 2:00, 11:00
 Fax. 025-223-2969, <http://www.ngchotel.co.jp/>

3. ホテル金寿 8,000, 9,000 / 12:00, 11:00
 Fax. 025-229-1393,
<http://www.info-niigata.or.jp/hotel/kinsu/>

4. ホテルダイヤモンド新潟 7,000, なし / 2:00, 11:00
 Fax. 025-223-5151, <http://www.diasmont.co.jp/>

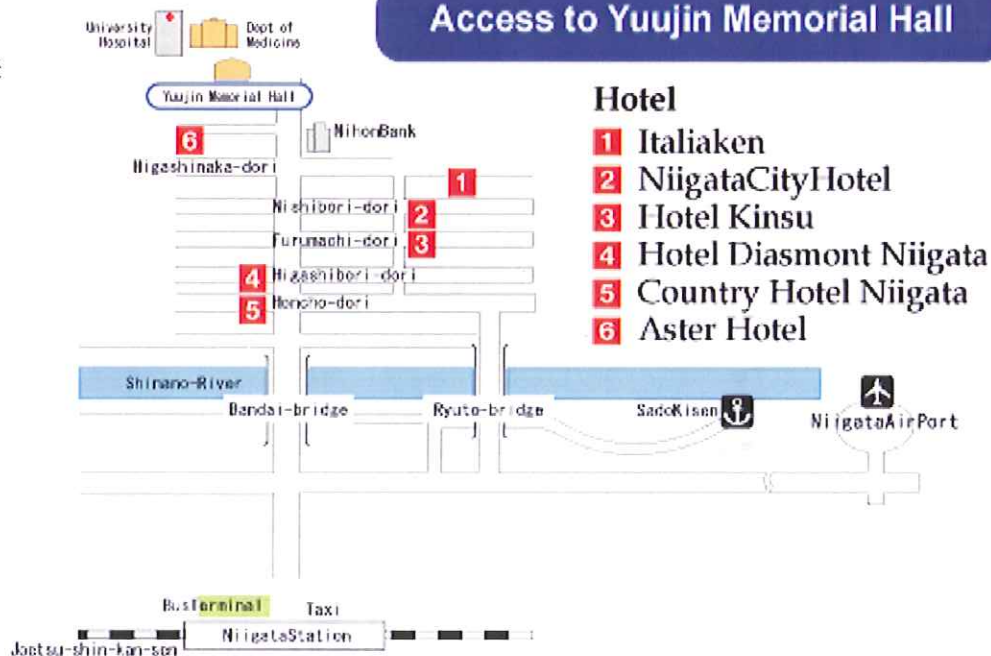
5. カントリーホテル新潟 6,000, なし / 3:00, 10:00
 Fax. 025-229-3500, <http://www.niigata-c.jp/>

6. アスターホテル 5,880, なし / 3:00, 12:00
 Fax. 025-228-4037, <http://atease.ne.jp/asterhotel/>
 宿泊は、ホームページの申込書をダウンロードしてお申込下さい。

事務局 〒951-8510 新潟市旭町通り1番町757
 新潟大学大学院医歯学総合研究科
 細胞機能講座分子細胞病理学分野
 Tel. 025-227-2102
 Fax. 025-227-0761

E-mail. mnaito@med.niigata-u.ac.jp
<http://www.okayama-u.ac.jp/user/ischs13/index.htm>

Access to Yuujin Memorial Hall



今後の肝類洞壁細胞研究会の方向性について

代表世話人 谷川久一

前回の第19回の研究会は、秋田大学消化器内科の渡辺純夫教授のお世話で、有意義な、また、楽しい会で終了したことは、美味しい秋田のお酒の味と共に、私共の心にいまだ残っている。そして今回は20回の節目の年にあたる。さて、この研究会は、振り返ってみると20年前に故市田文弘先生の御指導のもとに、久留米大学第二内科を中心にして始まった会である。私自身、この研究会を始めた理由は、大きく2つあったように思う。その1つは、当時第1回の国際クッパー細胞研究会がWisse教授を中心にして始まり、私も招かれて臨床との関わりについて述べた際に、諸外国でもこの肝類洞壁細胞が注目されてきたという認識が出来たこと、第2に、第72回日本消化器病学会総会が市田文弘教授会長のもとで行われ、その際、特別講演として肝類洞壁細胞を主題にして述べさせて戴いたが、この反響が大きく、皆の関心と呼んだことから、この様な細胞群の研究が、今後の肝臓病学の発展に重要ではなからうかと考えたからである。

そうして10年が経ち、一応、肝臓病学を研究する人々の間に、肝類洞壁細胞の認識も高まり、その間、肝線維化や門脈圧亢進の機序の解明など、この方面での業績も上がってきた。したがって、この研究会の初期の目的に達成したと考え、私の定年退官を機会に、この研究会を閉じるつもりであった。しかし皆の強い要望もあって、さらに10年の月日が経過し、今度20回の研究会を迎えるわけである。率直に私の思っていることを述べると、この後半10年間の肝類洞壁細胞研究も進歩したが、前半の10年に比べると、若干新鮮さに乏しい気がするし、また熱気も若干失われた感がある。したがって、もし今後、この研究会を継続するのであったら、今日の肝臓病学の現状を考えて、少し新しいものを加えてゆかなければならない。前回の世話人会でも、この問題が討議され、いくつかの研究会と併合して新たな発展を期したらどうかという意見が多い様であった。

私自身は、類洞壁細胞のうち、肝星細胞については、良い研究がなされて来たと思われるが、それでもこの10年間は、それほど発展はみられなかった様に思う。そこで、この際、新しい目標を持って、新たに出発することが必要の様に思われる。例えば、クッパー細胞やNK細胞は、肝という場で自然免疫に重要な役をなす細胞であり、一方、肝疾患の病態の理解に、肝を場にした自然免疫の役割が極めて重要であることから、自然免疫を主な主題の1つに加えた肝類洞壁細胞研究会にすることなども良いかもしれない。

いずれにしても、今後この研究会を続けるか、もし継

続するとした場合、どのような内容にするか、会員からの意見を受けた上で、今後の方向を見出したいと思っている。別紙にアンケート用紙を用意したので、積極的な御意見をいただけたら幸いである。

肝類洞壁細胞研究会役員 (2006. 3 現在)

【顧問】浪久利彦【代表世話人】谷川久一

【世話人】有井滋樹, 市田隆文, 円山英昭, 岡崎 勲, 岡上 武, 沖田 極, 織田正也, 小俣政男, 白鳥康史, 内藤 眞, 藤井秀樹, 藤原研司, 宮崎 勝, 和気健二郎, 渡辺純夫【幹事】河田則文, 坂井田 功, 高原照美, 竹井謙之, 野口和典, 持田 智

平成16年度 肝類洞壁細胞研究会 (事務局分) 会計報告

(H.16.10.1 - H.17.9.30)

【収入】	前年度繰越金	3,160,359
	年会費 (7,000円×125名)	980,000
	利息	22
	計	4,140,381
【支出】	研究会開催補助金 (18回)	100,000
	交通費	469,000
	宿泊費	208,000
	事務費	268,067
	次年度繰越金	3,095,314
	計	4,140,381

編集後記

今年は例年になく厳しい寒さでしたが、雪国でもようやく春が訪れている頃でしょう。諸般の事情で遅れておりましたNo. 6をお届けします。この号は第13回国際類洞壁細胞シンポジウムの国内向けサーキュラーと兼ねさせていただきました。突然の開催地の変更で急いでここまでこぎ着けられました内藤眞会長ならびに教室、ご関係の皆様のご努力に感謝いたします。また谷川先生には今後この研究会の方向性について貴重なご意見をいただきました。確かに本会もそろそろ大きく舵をきる頃合いにきているような気もいたします。研究会の今後の在り方についてどしどしご意見をお寄せください。また今回の国際シンポジウム当日参加者に配布するSINUSOID NEWS INTERNATIONAL (英文) の発行も企画しておりますので、その方の原稿 (A4, 1~2ページ程度、研究、エッセイ、日本紹介など) も募集しています。7月末ごろまでに編集部宛メールで投稿をお待ちしています。(和気健二郎)

SINUSOID NEWS 編集部

編集長 和気健二郎

編集委員: 谷川久一、内藤 眞

107-0052 東京都港区赤坂 8-10-22

(株) ミノファーゲン製薬 肝臓リサーチ・ユニット内

FAX: 03-3402-6397

E-mail: wake@minophagen.co.jp

(印刷: 肝類洞壁細胞研究会事務局)